



TITLE:

所謂出血性メトロパチー患者の卵
巣機能に関する研究(Abstract_要
旨)

AUTHOR(S):

真鍋, 英夫

CITATION:

真鍋, 英夫. 所謂出血性メトロパチー患者の卵巣機能に関する研究. 京都
大学, 1959, 医学博士

ISSUE DATE:

1959-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/210679>

RIGHT:

氏 名	真 鍋 英 夫 ま なべ ひで お
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 2 4 号
学位授与の日付	昭 和 34 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科・専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	所謂出血性メトロパチー患者の卵巢機能に関する研究
	(主 査)
論文調査委員	教 授 三 林 隆 吉 教 授 鈴 江 懷 教 授 早 石 修

論 文 内 容 の 要 旨

著者は、いわゆる出血性メトロパチーの本態把握の一手段として、その卵巢機能を尿中 Östrogen および Pregnandiol 排泄量の変動の面から追求し、次いで本症患者に性ステロイドを投与した際の止血効果、卵巢機能に及ぼす影響を検索、さらに本症類似の状態とみなされている持続発情白鼠の卵巢機能をその組織学的所見よりうかがい、またこれに前記薬物を投与した際の変化を追求した。

その結果、まづ対照となった健康非妊婦人では尿中 Östrogen および Pregnandiol 排泄量は月経周期に伴なって規則正しく変動し、前者は排卵期および次回月経前数日目にピークを作り、後者は黄体期にのみ排泄されることを認め、これらは卵巢における Östrogen および Progesteron 分泌量の消長を反映しているものであることを確認した。

いわゆる出血性メトロパチー患者においては、尿中Pregnandiol の排泄はなく、そのうち多くの例において出血直前に Östrogen 過剰の状態があり、その低下とともに出血の開始する事実を認め、この所見と東条が同一実験対象で下垂体機能を追求した成績とを照合して、本症の本態は下垂体機能失調による排卵障害、存続卵胞からの Östrogen 過剰分泌状態であり、存続卵胞の退行によりいわゆる Östrogen の消退出血を起こすものであるとの推論に到達した。

したがって、本症の原因療法は排卵性周期の確立にあることに注目し、著者等は正常性周期の排卵期における Gonadotropin の消長になぞらえて妊馬血清性 Gonadotropin 2000 I. U. と絨毛性 Gonadotrpin 1000 I. U. とを同時に3日間連続投与したところ、これによって排卵が誘発され、正常性周期に復帰し、しかもそれが一時的ではなく持続的であることを尿中 Östrogen, Pregnandiol 測定成績および臨床所見から立証した。

一方、Östrogen, Progesteron あるいは Androgen の投与はいずれも止血効果ではすぐれているが、尿中 Östrogen, Pregnandiol 排泄量におよぼす効果は一時的であり、排卵を誘発したものはなく、したがってその治療効果もまた対症療法の域を出ないことを認めた。

次いで、持続発情白鼠の卵巢所見からいわゆる出血性メトロパチーと同じく下垂体の機能失調による二次的卵巢機能障害により排卵が抑制されていることを再確認し、さらにこれに前記性ステロイドを投与した場合はいずれも一時的に排卵が誘発されるが正常性周期の確立には至らず、これまた一時的の効果でしかないことを認めた。

以上、著者はいわゆる出血性メトロパチーは下垂体の機能失調に基く二次的な卵巢機能障害で、その出血は過剰 Östrogen の消退出血であることを確認し、その治療法は一時的な効果しか示さない性ステロイドよりも Gonadotropin 投与がすぐれていることを卵巢機能の面から立証した。

論文審査の結果の要旨

共同研究者東条は、いわゆる出血性メトロパチーの一次的原因は下垂体前葉の Gonadotropin 分泌異常による排卵障害であることを推論したが、真鍋は同一実験対象について東条と同じく出血前から出血中にわたって尿中排泄 Östrogen, Pregnandiol 量を経日的に測定、さらに持続発情白鼠の卵巢の組織的検索をも行ない、東条の尿中 Gonadotropin 所見、下垂体前葉所見と対比検討することにより、本症における不正出血の発来機序が下垂体性排卵障害による Östrogen の過剰分泌、存続卵胞の退行による Östrogen 分泌の低下によるもの——いわゆる Östrogen 消退出血——であると推論、諸種ステロイドホルモンの単独投与では正常周期は誘発されないが妊馬血清性 Gonadotropin と絨毛性 Gonadotropin の大量併用療法によってそれが発来することを尿中 Östrogen, Pregnandiol 測定成績からも立証、東条との協力のもとにいわゆる出血性メトロパチーにおける出血機序解明ならびにその原因療法確立に貢献したものであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定した。

〔主論文公表誌〕

日本内分泌学会雑誌 第36巻（昭.35）第9号予定

〔参考論文〕

1. 産婦人科領域に於ける Ircodin の使用経過
(西村敏雄と共著)
公表誌 産婦人科の実際 第6巻（昭.32）第12号
2. 絨毛上皮腫の内分泌学的研究 特に Progesteron 投与の効果
(大橋敏郎ほか4名と共著)
公表誌 産婦人科の実際 第7巻（昭.33）第10号
3. 無排卵性周期に於ける Gonadotropin 投与の効果
(大橋敏郎ほか3名と共著)
公表誌 産婦人科の世界 第11巻（昭.34）第3号
4. 悪性の経過をとった卵巢顆粒膜細胞腫の1例
(北村満雄と共著)
公表誌 産婦人科の進歩 第11巻（昭.34）第2号
5. 分娩予定日超過 その統計的観察並びに尿中諸種ホルモン測定成績
(大橋敏郎ほか6名と共著)
公表誌 産科と婦人科 第26巻（昭.34）第10号

6. 産婦人科領域に於けるナフチオニンの使用経験
(西村敏雄ほか2名と共著)
公表誌 産科と婦人科 第26巻(昭.34)第11号
7. 不妊の内分泌学的研究 第1報 不妊婦人における尿中諸種ホルモン測定成績
(大橋敏郎ほか2名と共著)
日独医報 第4巻(昭.34)第4号